

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 9

2006年7月発行

〒535-0022 大阪市旭区清水 2-16-22 TEL06-6953-2665 fax06-6953-2655 E-mail houpu@river.sannet.ne.jp

不登校児支援

「あさひ不登校ねっと」の活動から ～ミニ研修会『連携を探る』開催～

2006年6月21日(水) 18:00~20:30

大阪市旭区役所 第1会議室

参加者 14名(小学校教員3名、スクールカウンセラー1名、
あさひ不登校ねっとメンバー10名)

「あさひ不登校ねっと」では、事例を通じて連携のメリットや連携の仕方について語り合うことを目的に、生江・両国地域の小中学校の先生方に呼びかけて、ミニ研修会を開催しました。あさひ不登校ねっとのメンバー以外の参加者は4名と少数でしたが、学校の先生方とつながる第1歩になりました。「学校間の情報交換」「地域と連携した支援」「親の思いを知ること」などの必要性が語り合われました。今後、それぞれの学校との連携をすすめ、このようなミニ研修会を重ねて、地域ぐるみのサポートを模索していきたいと思えます。

<意見交換から>

- ・ 担任の力量に任されているところがある。担任が1人で抱えるのは厳しい。
- ・ 学校内だけでは限界があるのでは。地域の資源を使うことも大切では？援助者が孤立しないためにもネットワークが必要である。
- ・ 子どもが担任と会ってくれないような場合、教師だけの頑張りでは解決しない。
- ・ (支援者は) 親との信頼関係を作ることが大切。
- ・ 家庭が横の連携を作る。母親を支えてくれる人が必要。当事者どうして話をして力を取り戻し、学校と共に地域とのつながりを持つ。
⇒ 旭区内に「サークル虹」という不登校児の親の会があります。
- ・ スクールカウンセラーと先生を繋ぐ教師が必要では？1中学校区(中学校)に1人のコーディネーターがいればいいと思う。
⇒ 大阪府(大阪市除く)にはスクールソーシャルワーカーが設置されています。
- ・ 社会とつながる手段は、学校以外にもあるのでは。学校以外の場を視野に入れながらのサポートが必要。
- ・ こういった勉強会には、いろいろな学校からの参加が必要だと考える。

おはなし会の開催

2006年6月5日(月) 10:30~12:00

旭区在宅サービスセンター 多目的室

参加者： 子ども39名、大人35名(20代6名、30代22名、40代1名)

きしゃぼっぽスタッフ： 10名

ほうふ設立以来、恒例となった「魔女まじょ」さんの「おはなし会」です。今年度から、あさひ子育てネットワーク「きしゃぼっぽ」のお母さんたちが中心に開催することになりました。日程調整、チラシの配布、役割分担や運営の話し合いなど、いろいろと大変だったと思いますが、当日は大勢の親子が参加してくださいました。また、おはなし会の後で、「魔女まじょ」さん達と「きしゃぼっぽ」のメンバーで話し合いをすることができ、有意義な時間となりました。反省点は、来年にいかしていきましょう。次は、親子体操やコンサートなど、地域の公共機関と連携して家族で楽しめる企画を検討しています。ママ達のパワーが大きくなっていくのを感じています。

<参加者のアンケートから> 回答29名

- ・ 楽しかった。親も子も楽しかった。子どもが楽しそうだった。
- ・ 「カレー作り」楽しかったです。
- ・ 手品が楽しかった。
- ・ 次の会を楽しみにしています。
- ・ BGMが流れたり、テンポが良かった。
- ・ 大勢で聞こえにくい時があったので、マイクを使って欲しいです。
- ・ じっとしていられない年齢なので心配でしたが、楽しそうに参加していました。
- ・ 子どもが小さく静かに聴くことができませんでした。もう少し大きくなってからの方が良かったかも。



参加者のお住まい：清水11名、高殿7名、新森2名、大宮2名、今市2名、
千林1名、大使橋1名、その他2名

子育てを楽しんでいますか?： はい17名、いいえ0名、どちらともいえない6名
(複数回答有) [楽しい22名、悩みがある3名、自信がない3名、しんどい5名]

<スタッフの振り返りから>

- ・ 楽しくて、サークル活動の参考になった。
- ・ 子どもが自由な感じで参加でき、良かった。
- ・ 小さな子どもには時間が長かったかも。
- ・ お天気がよく、参加者が多く良かった。
- ・ 事前申し込みにした方が良かった。大人だけの参加の場合、どのような人かわからず不安。
- ・ アンケートにこのイベントをどこで知ったかという項目を入れたほうが良い。
- ・ 子どもの年齢の幅が広く、聞いていない(ぐずる)子どももいてざわざわしていた。



障害児支援

バーベキュー大会

2006年5月14日(日) 13:30~16:30

鶴見緑地公園 大芝生&バーベキュー場

参加者 大人 16名(父親4名、母親11名、祖母1名)、子ども16名
ボランティア 11名(専門学校生4名、大学生(院生含)6名、社会人1名)

前日は大雨でお天気の心配をしましたが、当日、雨は上がり無事に開催することができました。知的障害をもつ子ども、医療的ケアの必要な子ども、車椅子を使用している子どもといろんな子ども達の参加がありました。初めてほうぶのイベントに参加されたご家族もいらして、楽しい出会いの場となりました。

ボランティアの学生さんも最初は子ども達とどう関わったらいいのか戸惑っていましたが、ゲームを通じて徐々に慣れて遊んでくれました。ほうぶの初めての野外活動だったこともあり、準備不足でご迷惑をおかけしました。スタッフは、焼きそば作りに追われて、写真を撮るのをすっかり忘れていました。ご参加の皆さん、ごめんなさい。そして、ありがとうございました。

プログラム

13:00 ボランティア集合

時間を間違えて、午前から来てくれた学生さん達がいきました。長時間ありがとう。

13:30~ ゲーム

あいこじゃんけん、握手しよう、なべなべ底抜け、
グループに分かれよう、バースディチェーン
(専門学校の学生さんによるゲームも2つ含まれます)

14:30~ バーベキュー

16:30 改めて自己紹介をして終了

さよなら。また会おうね。

後日、Mパパさんから感想メールをいただきましたので、ご紹介します。

1) 進行について

当日のスケジュールを最初に説明すればいいと思った。ゲームをいくつかして移動、バーベキュー広場で何時からスタート、何時までで終わりとか分からなかった。

⇒ 事前に配布したチラシにゲーム開始とバーベキュー開始の時刻を書いていただけでした。ゲームは数を決めず時間を見ながらしました。野外活動でも当日にプログラムを準備すべきでした。今後の活動に反映させます。(ほうぶ)

2) バーベキューについて

焼肉や焼きそば等、思っていたより沢山あってお腹一杯食べられました。バーベキューテーブルも電気炉で安全だし、綺麗だったので良かった。娘Mはバーベキュー初体験でした。

⇒ 初めてのことで、肉の量が少ないかもとヒヤヒヤでしたので、ホッとしました。Mちゃん、バーベキュー初体験で良かったです。でも、ゲームとバーベキューの間、ずっと緊張していたMちゃん。どうしたら、Mちゃん的笑顔が見れるのかなあ。これから時間をかけて仲良くなりたいです。Mちゃん、よろしくお願いします。(ほうぶ)

* Mパパさん、ありがとうございました。みなさんからのご意見もお待ちしています!

ボランティア研修会 & 交流会

～ 障害をもつ子どもとともに ～

2006年5月27日(土) 14:00～17:00

大阪市立城北市民学習センター 研修室1

参加者：大学生7名 スタッフ：3名

障害をもつ子どもとどうかかわればいいのでしょうか？知識や技術を習得することも大切ですが、もっと大切なことがあります。その大切なことに気づいていただこうと、障害児の親の想いを聴き、「いのち」のことを考えるところから始めました。初めて人前で我が子の話をするというKさんは緊張気味でしたが、その内容はずっしりと心に残るものでした。これから、さまざまな活動を通して、ボランティアのみなさんに、かけがえのない子どもと出会い、寄り添っていくことを通して、かけがえのない自分自身にも気づいて欲しいと思います。

<研修内容> 講演「ありのままに、地域であたり前に」

ワークショップ「障害児の地域生活支援について考えてみよう」

グループで意見交換・交流

<感想から> Kさんの講演「ありのままに、地域であたり前に」を聴いて

- ・「毎年誕生日を迎えることはあたり前じゃなくて、大変で、すばらしいこと」といわれたのが心に残っています。一年一年必死の思いで誕生日を迎えてきていたんだなあと思うとすぐ考えさせられた。私の子どもが障害をもって生まれてきたら、正直、Kさんのように育てていけるか自信がありません。でも、障害をもつ、もたない、とか関係なく、精一杯愛情を注いで育てたいです。
- ・「どの命も価値は同じ 他人から左右されることはない」「能力によって区別することは差別することと同じ 他人に人生を決める権利はない」と言われました。私が専門職になったら、その人の意見や意志をちゃんと聴き、助けていきたいなあと思いました。
- ・「障害をもって生まれてくるのが不幸なのではなく、周りの人の障害に対する反応が不幸」と言われた言葉が印象的でした。
- ・「障害のあるなしは関係ない」という言葉が心に響きました。あるからといってなんなのか、ないからといってなんなのか。私は幸せでいてくれたらそれでいいのではないかと思います。
- ・今までずっと、障害者や介護者に対して「大変だろうな」とか「しんどいだろうな」とかが一番先に思うことだったけれど、話を聴き終わってみんなで感想を話した時、Kさんは「大変なことではないし、みんなにもできることですよ」と言われて、その時、初めて私の思いが変わったような気がしました。大変と思ってやってはいないとわかりました。

<アンケートから>

- 今後、子どもと関わっていく上で大切にしたいこと
 - ・ 話せないとしても、その子の意志を尊重することが一番大事。言葉が無理なら小さな表情一つでも見落とさないように。その子の個性や思い。
 - ・ 母は強いけど強くない。子どもが母を強くする。
 - ・ 同じいのちをもっているということ。特別な感情や変な同情でなく、自然に関わっていきたい。



- この研修会をきっかけにあなた自身が変わっていくとしたらどう変わりたい？
 - ・ 今生きていることを素直にありがとうと思いたい。人の気持ちをわかる人になりたい。
 - ・ ただ、他人事というふうに思わずに、もっとしっかり目を向けたい。まだまだ目を背けているところがある。
 - ・ 障害者が幸せと思うように考えられる人になりたい。
 - ・ 何が違うとか特別に変えずに考えていきたい。その人なりの自分なりの幸せはここにある。
 - ・ 今まで何回か、障害をもつ子ども達と接してきましたが、その時にはあまり思いを理解する事ができなかったのもっと子ども達とふれあい、思いを理解できるようになりたい。
- グループで話し合っ感じたこと
 - ・ 話し合うと、一人ひとり感じることは違うんだと思った。
 - ・ みんな思っていたことは同じだと思った。もっと色々なことをいろんな人に聞いてみたい。
 - ・ 自分の気づいていないところがあったので、話し合えてよかった。
 - ・ 自分1人で考えることより、みんなの意見や話を聞いて、考え方や捉え方が変わった。
 - ・ 同じような年齢だけど、考えていることはみんな違って、意見交換できたことがすごく楽しかったし勉強になった。
 - ・ Iさん(参加の学生さん)の「幸せはその人自身が決めることであり、他人が評価してはいけない」「障害者にしかできないことがある」という言葉が心に残った。
 - ・ それぞれが積極的にいろんなことに取り組んでいるようだったので、私も積極的にボランティア活動に取り組んでいきたいと思った。

社会参加をどう支えますか？ 坂井聡氏講演会

～コミュニケーションについて学ぼう～

2006年6月17日(土) 13:30~16:30

旭区在宅サービスセンター 多目的室

参加者：42名(一般30名、学生12名)、スタッフ&託児ボランティア：5名

障害をもつ子どもとコミュニケーションをとるにはどうしたらいいの？どうすれば通じ合う関係が築けるの？そんな問いに答えてくれる坂井聡さんの目からうろこの面白いお話でした。バリアフリー展ではお目にかかれない機器の展示やコミュニケーションのヒント満載の本の紹介も行いました。

<アンケートから> 回答数 27名

講演会はいかがでしたか

- ・ 良かった : 26名 ふつう : 1名
- ・ 役に立った : 21名 未記入 : 5名

回答者内訳 (複数回答有)

- 障害児の親 : 8名 (受付把握 10名以上)
- 教師 : 1名 (受付把握 6名)、保育士 : 1名、
- ボランティア : 2名、学生 : 10名、
- 介護職 : 7名、音楽療法士 : 1名



<アンケート感想>

- ・ とても面白く理解しやすい内容で話についていった。
- ・ 坂井先生の講演会の参加は2度目ですが、再認識することが沢山あった。（4回目という方もいらっしゃいました！）
- ・ 子育て支援ボランティアに参加し、今後の役に立てればという思いで本講演に参加したが、大変勉強になった。実際に障害児との深い接点はなく、分からない事も多かったが、子どもにとっての基本的な接し方という事を深く考えることができた。
- ・ 学校の授業で自閉症の子どもについてのレポートを書いたりして、なんとなく知っている事はあったが、実際に話を聞けてすごく良かった。
- ・ さまざまなことで、発想の転換の必要性を感じた。ユーモアを交えてとても役立つ内容でありがたかった。（発想の転換の必要性という感想は複数ありました）
- ・ とても分かり易く、参考にしたい事例も多くあった。しかし、流れが速く、メモを取る時間やパワーポイントをうつす時間が足らなかった。
- ・ 昨日まで知的障害児通園施設で実習をしていた。その中の対応で感じたこと、悩んだことに関して少しヒントや発見があった。自分自身が小さい頃から障害をもつ方と関わることがあったのに、どこかで特別に分けていたのかもしれないと思った。今日の話聞いていて、“自分も一緒やん”と、同じように考えたり感じたりしていることを知った。今日の話をもとに、もっと色々な視点で実習のことを振り返りたいと思った。
- ・ 知的障害者のグループホームでの仕事をしている。コミュニケーションできる方とできない方がいて、正直できない方とはこれで(この関わりで)いいのかなあ？と考えていた。なんとなくきっかけが見つかった様な、...
- ・ もう少し長くても良かったのではないかと(例えば休憩を交えて4~5時間位)。講師の方や関連書籍等についてのHPアドレス、その他情報も別途用意して欲しい。こういう講演会の回数を増やして欲しい。
- ・ 技術を磨かないといけない、“しいたけ”は嫌だと改めて感じた。めがねのたとえ話は自分も感じていたことだったので嬉しかった。自分が“左利き”なだけでもストレスを感じるのに、障害のせいでのストレスは想像以上だろう。（大好きな人が食べさせてくれる嫌いな「しいたけ」と、仕事として介護者が食べさせてくれる大好きな「りんご」。さあ、あなたならどちらを選ぶ？）
- ・ 親の希望・価値観ではなく、本人が表現していることを認めてあげる・大事にしてあげることで、楽しんで共に前進していけるよう、もう一度生活環境を見直そうと思う。
- ・ コミュニケーションの方法・手段は沢山あるが、介助者が方法を間違えると多大な影響を相手に与えてしまう怖さを知った。
- ・ これから出会う子どもたちと接していくにあたって、聞いていて良かったと思える内容だった。
- ・ コミュニケーションのとり方にもさまざまな方法があることが分かった。



障害をもつ子どもの

保護者交流会

～ 出会おう 話そう つながろう ～

2006年7月1日(土) 13:30~16:00

大阪市立城北市民学習センター 研修室1

参加者：障害児の母親 13名（スタッフ2名含）、
学生ボランティア（記録）：3名、 スタッフ：3名

「人は誰でもパワーを持っている」ことを信じて、私たち「ほうぷ」スタッフは活動をしています。誰もが自分で課題解決をする力を持っています。そして、同じ体験をした者同士が話し合うことによって、課題を抱えてパワーダウンしている人は力を回復し、それぞれもまた、明日からがんばるパワーを得ることができると考えています。私たちは、そこに寄り添ってつながっていくことを大切にしたいと思っています。

今回は、最初に全員で大きな輪になって自己紹介をし、次にそれぞれが「私の幸せな時」を発言し、発言した人が次の人を指名していく方法で、出会いの場作りをしました。その後、2グループに分かれて意見交換をしました。2グループとも、1人の方の悩みに対しての話し合いで始まりました。きっと、みなさんの近くにも似たような悩みを抱えた方がいらっしゃることでしょう。「障害児を育てている」母達はどんな話し合いをしたでしょう。話し合いの内容を学生ボランティアに記録してもらいました（記録用紙は個人情報保護のためほうぷで回収・記録まとめ担当：ほうぷスタッフ）。学生さん達は学校ではできない学びをしたことと思います。

交流会中、一時保育を行いました（P. 9 参照）

<グループでの話し合い>

①グループ（就学前・小学校低学年グループ／メンバー：母親7名）

子どもに障害のあることがわかってまもないAさんの不安や戸惑いに対して、メンバー個々人の経験談を伝え合い、障害児を育てる親という当事者によるセルフヘルプ機能が十分に活かされた時間になった。

Aさんの語りに対し、メンバーからは周りの人たちに対して障害の理解を促していく過程が具体的に語られた。クラスメイトへの伝え方については、①その都度、子どもの特徴や嫌がることを友達に具体的に伝えていく、②（障害を題材とした）絵本や漫画を読んでもらう、③授業のなかで親が子どもの話をするなどの方法が語られた。メンバーの経験談からは、第三者に対して子どもの特徴を積極的に発信していくことは肯定的にとらえられ、本人に対する周囲の対応が落ち着くことによって、本人も落ち着いた態度をとることができるというものであった。とりわけ、子どもの世界に対する信頼感に基づく発言が多くみられ、子どもの特徴を伝えることによって子ども同士の関係が柔軟に変容していくことが語られた。それに付随して、メディアでの障害の報道のされ方などがセンセーショナルであり、障害名を公表しづらくさせる風潮について問題提起がなされ、意見交換がされた。次に、子どもへの障害の告知をどのようにすればよいかということが話し合われ、さらに、いじめへの対応、こだわり行動への対応、兄弟へのかかわり方についても情報交換や意見交換がなされた。

最初に悩みを話してくださったAさんが、メンバーの経験談を聴きながら、「～してみる」と対応方法を自らが語る場面もみられた。メンバーがAさんの思いをそのまま受けとめ、経験を語りながらも、本人から解決策を導き出すようなサポートがなされていた。Aさんのみ

ならず、他のメンバーにとっても、自らの経験をふりかえりながら、ものの見方を拓げていくに十分な内容であり、さらに、自らの経験が他者を支援することができることを実感できる時間であったと思われる。

②グループ（小学校高学年・中学生グループ／メンバー：母親6名）

中学校の選択（養護学校／校区の中学校）に迷っているBさんに対して、同じく選択の時期である親達や中学生の親達が思いや体験談を語りあった。中学生の保護者達の子どもは校区の中学校に通っており、他のメンバーも校区の中学校を希望しているため、意見に偏りがなかったとは言えないが、自分の意見を押し付けるのではなく、情報を提供し、それぞれの体験談や思いを語り、養護学校の見学もすすめるなど、最終の決断はBさんにあることを大切にするという話し合いができた。また、校区の中学校の情報交換もなされた。

最初にBさんの揺らぐ想いをメンバーが聴き、その想いに対して地域の中学校を選んだ理由や養護学校に見学に行った体験談が話された。「今の年齢だからこそ同じ年の子ども達の中に入れて、友達を作ってやりたいと思った」、「本人と養護学校の見学に行き、友達と一緒に地域の中学に行きたいと言う本人の意志で決めた。地域社会がリハビリの場であり、友達の中で切磋琢磨することが大事だと思って育ててきた」、「将来、子どもに働いて欲しいし、結婚もして欲しいと思う。社会のルールを守っていくには地域の学校で集団生活をさせることが必要だと思った」などの思いや体験談が語り合われた。また、「『本人が楽な状態の学校』が、その子の将来にいいかどうかはわからない。専門家はその子自身の能力を伸ばすことを重点的に考えているのかもしれないが、地域で生きていく力を育てるという視点が大切だと思う」という意見も出た。最終的に決めるのは、親と本人であることが確認された。

兄弟との関係についても意見交換がなされた。また、第2次成長期という難しい年齢で、親は戸惑うことも多いが、子どもの成長に合わせてその都度で対応を考えていく必要性が話し合われた。Bさんの悩みについて話し合ったが、メンバーは「中学校選択」というテーマを通して、子どもの将来の姿を考え、自立に向けてどのように育てていくかという大きなテーマについても考える機会となり、地域で育つことの大切さを再確認しあった。今後、Bさんが、養護学校を選択したとしても、地域とのつながりの中で子育てをして欲しいと思う。

<アンケート・感想から>

- ・ たくさんの意見など、活発に出て、自分が今まで思ってきたこと、また、そういう面で捉えることもできるんだなあと考えさせられたり、有意義な時間でした。
- ・ せっかくの集まりなので、将来みんなで一緒に何かできるくらいのつながりができるようにあったらいいなあと思います。



<学生ボランティア感想から>

- ・ 障害をもつ子ども達と関わる機会は今までに何度もあったのですが、保護者の声を聞くのはなかなかなかったので、貴重な体験だった。まだまだ自分は障害をもつ子どものことを特別視しているのではないかと感じた。親御さん達が今まで悩まれ発見されてきたいろいろな対応や気付きは、これからの関わりの中で活かしていけたらと思う。
- ・ 今までとは違う視点で考えることができた。たくさんの保護者の方の話が聞けてよかった。

障害をもつ子どもの「保護者交流会」中の 一時保育ボランティア

2006年7月1日(土) 13:00~17:00

大阪市立城北市民学習センター 研修室3

参加者：子ども 19名(うち 障害児11名)

学生ボランティア：20名(大学生5名、短大生12名、専門学校生3名)

社会人ボランティア：2名、 スタッフ：1名

たくさん子ども達とボランティア達が参加してくださり、にぎやかな保育となりました。12時半から会場設営、13時から担当の子ども情報を提供し打ち合わせをしました。保育終了時には、それぞれの保護者に「コミュニケーションカード」にて保育内容を伝えました。その後、アンケートの記入や感想の発表を行い、振り返りタイムをもちました。

<アンケートから>

ボランティア活動の感想(学生)

写真を撮るのを忘れていました。すみません!

- ・ 始まる前は、どんな子が来るのか、どうやって遊べばいいかいろいろ考えていました。初めてその子どもに会って、「遊ばない」「名札は貼らない」と拒否されて心配でしたが、時間が経つにつれて、よく話すようになって、少しは仲良くなれたかなと思いました。一緒にいると本当に障害があるのかなと思う子が多くて、自分の担当じゃない子とも仲良くできてうれしかったです。実際に経験しないとわからない事が多いと思い知らされました。
- ・ やっぱり子どもが好きで、子どもと関わる仕事がしたいと本気で思いました。すごく楽しかったです。
- ・ 最初は何をしゃべればいいのか、何をして遊べばいいのかわからなくて、戸惑いました。でも、途中から子どもが抱きついてきてくれて、徐々に子どもの笑顔が増えてきて、私もすごく楽しかったです。また、保護者交流会(記録)などに参加していきたいと思います。
- ・ 障害のある子と関わることに最初は緊張していたけど、こっちが緊張していたら、子どもも緊張してしまうと感じた。きっかけを作ることで、楽しくなったり、笑顔を見ることができると思った。
- ・ 教科書では学べないことがたくさんあって、すごく勉強になった。
- ・ 何が好きかというのは一人ひとり違うし、それをわかって遊ぶのは本当に大変だなと思った。でも、すごく楽しかった。

保護者から学生さんへ(コミュニケーションカードを読んで)

- ・ やさしく見守ってくれていたんだなああとメッセージを読んで感じました。無理に遊びに誘うのではなく、ペースを見ながら寄り添ってくれるサポート、ありがとうございました。
- ・ 短時間でしたが、子どものようす、特徴をしっかりと捉えてくださっていることに驚きました。兄弟二人とも楽しかったようで、本人はまだまだ遊びたくて少しすねていました。

<スタッフ・社会人ボランティアのふりかえりから>

- ・ 全体の流れはスムーズで、学生さんの前向きで素直さ一生懸命さが伝わってきた。
- ・ コミュニケーションカードの記入はよいと思うが、子どもから目を離して机に向かって(背を向けて)書いている学生さんが多く、子どもが部屋から出て行ったことに気がつかない担当者もいた。記入中にもっと声をかければ良かった。
- ・ 大人の人数も多いため部屋が狭かった。コーナー作りなど事前に準備しておけば良かった。